



Yamagishi Student Project Support Program

山岸学生プロジェクト支援制度

10th Anniversary
Commemorative
Booklet



山岸学生プロジェクト支援制度

これまでの採択者数

過去11年間の総支給額

248名

5,125万円

[趣旨]

現実世界に実際に働きかけるSFCの精神を体現した、世の中にインパクトをもたらす研究活動を重点的に支援する。

[寄付者]

慶應義塾常任理事／株式会社慶應イノベーション・イニシアティブ代表取締役社長／グリー株式会社共同創業者 山岸 広太郎 氏

[支給額]

単一テーマ：上限30万円／件
学際的テーマ：上限50万円／件

[募集時期]

年2回／春：5月中旬、秋：10月下旬

[対象者]

「研究会A」「研究会B」「卒業プロジェクト2」のいずれか（総合政策学部・環境情報学部設置）、
「プロジェクトII」（看護医療学部設置）を履修予定の学部3・4年生

※進級時期にあわせ募集
※単一テーマは個人／グループ可
※学際的テーマはグループ応募とする

Contents

寄付者ご挨拶	P.03
採択者インタビュー	P.04
10年を振り返って	P.15
春学期採択者の1年の流れ	P.16
過去の研究課題名一覧	P.17



寄付者ご挨拶



学生の研究活動への応援の想いを込めた支援制度が、 学生を育て、未来の「社中協力」の輪の一助となることを願う

10周年にあたり、審査をはじめ実務に尽力いただいている教職員の皆様に心から感謝いたします。また、多くの学生が意欲的に研究に取り組み、応募してくれたことをありがたく思います。

はじめは、総合政策学部の國領二郎先生から「研究活動支援制度の多くが、修士生以上を対象にしているため、学部生向けの研究活動の支援制度をつくりたい」というお話をいただいたことからです。2008年の大学創立150周年記念寄付金に参加させていただいて以来、関わりがあったことに加え、國領研究会の学生が創業期のグリーでインターンを務め、卒業後に入社してくれたことから、先生とご縁がつながりました。SFCには、すでに楽天株式会社執行役員の小林正忠さん（SFC 1期生）が寄贈された「小林正忠教育奨励奨学金」があるなか、本支援制度は、学部生を対象に「現実世界に実際に働きかけるSFCの精神を体現した、世の中にインパクトをもたらす研究活動を重点的に支援する」ことを趣旨として立ち上げました。

私自身、経済学部3年生の時に、ゼミの友人と日本興業銀行河上記念財団（現みずほ学術振興財団）の懸賞論文・学生の部で入賞した経験があります。本格的な論文作成はよい勉強になりましたし、入賞という評価にはエンカレッジされました。ですから、私個人としては、本支援制度が学生にとって研究の励みになることを一番に願っています。

この10年を振り返ると、応募数が増えているだけでなく研究分野や内容が多様化していると感じます。報告会の学生プレゼンでは、いつも新たな分野への知見が広がり、大いに刺激を受けています。

慶應義塾には本支援制度に限らず、さまざまな支援やチャンスがあります。それは、創立時から続く「社中協力」の精神に基づくもので、社中とは学生・卒業生・教職員などすべての関係者のことです。私も学生時代から事業立ち上げにいたるまで、ゼミや学部の仲間とは助け合い、先生や卒業生の方からは多くのサポートを受けてきました。そのベイフォワードとして現在、支援者の一人として関わっています。学生の皆さんにはぜひ多くの支援やチャンスを活用して学ぶとともに、自身も社中の一員として、助け合う気持ちを忘れないでほしいと思います。今後は、例えば本支援制度をきっかけに採択者の方々がネットワークを築くなど、新たな社中協力の輪が広がっていってくれれば嬉しいですね。

山岸 広太郎

Kotaro Yamagishi

慶應義塾常任理事
株式会社慶應イノベーション・イニシアティブ代表取締役社長
グリー株式会社共同創業者

慶應義塾大学経済学部卒業後、株式会社日経BPに入社。編集やウェブ媒体の開発に従事した後、米国CNETの日本法人にて「CNET Japan」の初代編集長に就任。2004年に、グリー株式会社を共同創業。副社長として事業部門などを10年以上統括し、東証1部上場まで導く。2015年にKIIを設立。アカデミアの世界とビジネスの橋渡しとなり、社会課題を解決するディープレックススタートアップの技術・研究の社会実装を支援。2023年10月には大学VC初のインパクトファンド「KII3号インパクトファンド」を設立。ファンド運用の合計額は350億円に上る。日本ベンチャーキャピタル協会にて常務理事及び産学連携部会長も務め、VC業界の発展、大学発ベンチャーの創出に力を入れている。

Interview

採択者インタビュー

五十嵐 祐貴さん	P.05
木勢 翔太さん	P.06
池田 楓さん	P.07
小山 智己さん	P.08
水島 知央さん	P.09
山本 楠さん	P.10
川那子 進太郎さん	P.11
原 あゆみさん	P.12
山本 愛優美さん	P.13
桐山 大和さん	P.14

通信から宇宙開発へ。支援制度で得た貴重な経験が 未知の分野に飛び込む原動力に

五十嵐 祐貴さん(2013年度採択)

研究課題名
「センサRF タグのメモリ領域からの高速データ取得」

2016年に政策・メディア研究科(三次研究室)卒業後、国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構(JAXA)の衛星測位システム技術ユニットに研究開発員として配属。測位衛星の精密軌道時刻推定システムの研究開発、将来測位衛星の変調器開発などを担当。2019年より三次研究室と共同で人工衛星の環境試験無線化等の研究活動も並行。



研究助成金を得るフローも 研究生活において貴重な経験になった

私が応募した研究課題は、最近ユニクロのセルフレジなどで使われているような電子タグ(UHF帯RFID)からのデータ取得に関連したもので、情報システム側の工夫によってデータ取得を高速化することでした。この研究を通じて得られた通信プロトコルへの理解が、その後、修士論文で取り扱ったRFIDの無線通信そのものの研究を進める上での素地となりました。

また、学部生が研究助成金を得るフローを経験できたことも大きな意味がありました。修士生以上になると、研究を進めるためには予算の獲得が必要であることは、指導教官の背中を見て学ぶこととなりますが、山岸学生プロジェクト支援制度では、それを疑似体験することができ、論文採録とは異なる達成感がありました。今思えば拙い提案や発表であったかと思いますが、この体験が後にJAXA内の競争資金の獲得に向けた提案などにおいても、物怖じせずに臨む心構えを培ってくれました。

知見のない分野にも自分の努力を信じて 挑戦する姿勢が身についた

現在はJAXAでGPSなどの測位衛星の精密軌道推定技術の研究開発を主に担当しています。JAXAといえば、宇宙に憧れを持っているの就職かと思われそうですが、学部生や修士での研究課題は支援制度に応募したような通信関連でした。ただ、三次先生のご指導で修士論文のテーマの適用先の一つとして人工衛星を挙げたことや、三次先生が過去に大型展開アンテナなど人工衛星の開発を担当されていたことから、他社ではできない業務に興味を持ち、宇宙開発の仕事に関わることになったのです。

しかし、いざ就職してみると、知識・経験のない分野で、同期を見渡せば有名大学でその分野を専攻してきた秀才ばかり。背景となる基本技術の勉強だけでは不十分で、何本も関連論文を読み、恥ずかしながら忘れていた数学もやり直しました。きつ

と、SFCに入学したばかりの頃の私であれば確実に逃げ出していたことでしょう。しかし、本支援制度への応募をはじめ、研究室での活動を通して成長させていただいたおかげで新たな挑戦となる現場にも踏み込んでいく勇気が身につきました。

支援制度に挑戦し採択された経験が 人生の節目で後押ししてくれる

宇宙開発を取り巻く環境は今、大きく変化し、民間企業が目覚ましい成果を挙げるようになってきました。そうした転換期に国の研究機関に勤める者としては、流行り廃りに捉われずに技術や知見を蓄積し、公益・国益にかなう価値を提供できるように実直に目の前の業務に励んでいきたいと思っています。その一方、SFCの三次研究室との研究にも取り組んでおり、成果を得られるように活動を継続していきたいです。

思い返せば、私は三次研究室でたくさんの経験をさせていただきましたが、山岸学生プロジェクト支援制度は研究室での活動とは異なる文脈であり、通常の学生生活では得られない貴重な経験を得ることができました。当時は単純に予算をいただけことを喜んでいましたが、就職してしばらくたった身からすると、節々で私の背中を押してくれた、かけがえのない学びの機会でした。学生の皆さんには、ぜひこの貴重なチャンスを活用されることをお勧めします。



研究のために参加したNPO法人での仕事の経験や 人間関係が、新たなキャリアを拓いた

木勢 翔太さん (2014年度採択)

研究課題名
「農漁業共創型コミュニティ形成のための支援ツール開発」

2015年総合政策学部卒業後、株式会社QVCジャパンに入社し外資系TV通販会社でアシスタントマーケティングプランナーを務める。以降、文部科学省トビタテ！留学JAPAN事務局、独立行政法人国際協力機構（JICA）青年海外協力隊、Gigi株式会社を経て、2022年から株式会社雨風太陽で親子向け農漁業体験旅行事業などを担当。



農漁業者と都市生活者とのコミュニティから 共創を探る研究

支援いただいた研究課題は、一次産業の担い手である農家や漁師が抱える課題を都市生活者と一体となって解決していこうとするコミュニティに関する取り組みです。具体的には、NPO法人が運営する「東北食べる通信」という食べ物付き情報誌を事例に、オンラインコミュニティでやりとりされるコミュニケーションからどのような要素が共創につながるかを探求していました。月次・日次でダイナミックにコミュニティが変動する様子は、非常に興味深いものでした。また、生産者と都市生活者との共創事例が数多く見だせたことも成果です。何より東日本大震災を経ても、生産現場で力強く自然と向き合う生産者さんの姿に大きく心を動かされました。

研究は、「東北食べる通信」を運営するNPO法人の学生インターンとして活動しながら進めていました。学部生時代に背伸びをして受講していた政策・メディア研究科の授業で一緒だった先輩の院生の方が、このNPO法人とつないでくれたことがご縁でした。

研究とは異なる分野への挑戦から、 多様なキャリアを経て原点へ

卒業後、幅広い経験をしてみたいという好奇心から外資系TV通販番組の会社に就職しました。1秒間にいくら売上げるかという世界は、農漁業やNPOとはまた別の面白さがたくさんありました。その後、文科省の仕事やJICAの青年海外協力隊としてアフリカのモザンビーク赴任、コロナ禍での飲食店支援を行う仕事などを経て、再び農漁業の世界に戻りましたが、これらはすべて人とのつながりからくる偶然でした。学生時代に、未熟ながらも懸命に取り組んでいた姿勢が、周囲の目に留まっていたのかもしれない。

現在、働いているのは、インターンでお世話になったNPO法人



が株式会社雨風太陽という組織に変わり、新規事業の立ち上げにあたり私に声がかかりました。鮭のようにまた母なる川（組織）に戻ってみようと思えた背景は、研究で出会った生産現場で輝く農家・漁師の働きざまが心に強く残っていたからでした。キャリアを自発的に選ぶことも素敵ですが、人から仕事で求められることも貴重です。私は自分の軌跡から生まれた人との出会いや偶然も楽しみたいと思っています。

多くの人との出会いや交流の中で、 自分という人間が培われていく

学生時に所属した玉村研究会では「マーケティング：人間交際^{じんげんこうさい}」と習いました。人間交際とは福沢諭吉が「Society」を訳した言葉で、研究会では「人と人が交わりあい、紡がれた関係性をもとに多様な価値が実践の中で生み出されるもの」と解釈していました。当時はあまり奥行きを感じませんでしたが、仕事やキャリアを進めていくに従い、その重みを理解できるようになりました。私たちの行動規範や価値観はその人の人間関係の中で独自に織り込まれています。個人的には「直接体験—直接交流」が生身の人間のエネルギーを強く活性化すると感じています。SFCの学生の皆さんも人間関係の範囲を定めてしまうことなく、多様な接点を自分から開拓してってください。それが自らの価値観の原点にもなり、今後のキャリアの突破口になるはずです。

自身の経験をもとにスポーツ障害予防に取り組み、相手に寄り添うヘルスケアの仕事へ

池田 楓さん (2015年度採択)

研究課題名
「ジュニア・アスリートのスポーツ障害予防に向けて」

2017年総合政策学部卒業後、ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社に入社し、脊椎脊髄領域の営業担当として脊椎固定用スクリュー、脊椎ケージ等の販売、手術立会い。2022年2月に安全管理部へ異動し、脊椎脊髄領域の製品使用で不具合や健康被害が生じた際の行政への報告や被害を未然に防ぐためのプロジェクトリードを務める。



ジュニアアスリートの スポーツ障害予防に向けたリソースを提供

私が研究課題であるジュニアアスリートのスポーツ障害予防に取り組み始めたのは、日本とアメリカの学生スポーツの在り方を考えたことがきっかけでした。学生時代の多くをアメリカで過ごしましたが、日本ではクラブチームや部活動に所属すると、退部か引退まで同じ種目を継続することが一般的である一方で、アメリカでは秋はサッカー、冬はバスケットボール、春はソフトボールなど、シーズンごとに実施できる種目が異なります。このシーズン制を取り入れる理由の一つは、オーバーユースによる負傷を防ぐためです。スポーツに励む多くの学生がスポーツ障害に悩まされた経験を持っている中で、日本のスポーツ制度を変えることは難しいですが、スポーツ障害を予防するためのリソースを提供することで役に立っていないか、と考えました。具体的には、ジュニアアスリートのための障害予防やケアなどの情報をまとめたWebサイトを作成し、保護者や指導者に向けた情報提供を行いました。

学生時代から「健康」に向き合い続け、 DE&I へも関心を広げる

研究課題もふくめ、学生時代から現在まで、一貫して「健康」というものに向き合っています。就職活動は、医療機器メーカーを中心に行いました。中でも現在働いている会社はスポーツメディスン事業部があったため、その事業部に入って営業として働きたいと思い、志望しました。入社後の配属は希望していたスポーツメディスンではなく脊椎・脊髄領域の事業部となりましたが、脊椎手術の奥深さを知り、現在まで継続して同じ領域に携わっています。学生の時あまり考えたことがありませんでしたが、今の会社に入り多様性について考える機会が増えました。今まではいろいろな人がいることが当たり前だと考え、特に意識して行動を



していませんでしたが、社内のイベントを機に、過去の自分の発言や行動を省みることができました。現在は、誰もが心理的安全性を確保できるように社内DE&I (ダイバーシティ・エクイティ & インクルージョン) を促進するための活動を行っています。

人や情報の宝庫の大学で、 生涯の財産となる出会いを得てほしい

私は高校時代にスポーツで怪我をし、手術・リハビリをした経験から、SFCでは「ヘルスコミュニケーション」を研究の柱とする秋山美紀研究室に所属し、並行して夜間の専門学校にも通いアスレティックトレーナー学科でスポーツ医学を学んでいました。部活がある日は5時台の始発電車に乗り、大学の授業、専門学校を終えて夜10時頃帰宅する生活をしていました。大学での授業は、スポーツや健康と名の付くものはほとんどすべて受講しました。充実していましたが、もっといろいろな国の言語の授業も受講しておけばよかったと思います。山岸学生プロジェクト支援制度を通じて、多くの方に出会い、お話を伺った経験は、「患者様を家族だと思う」という自分の軸を形成してくれました。在学生の皆様には伝えたいのは、大学は情報と人脈の宝庫だということ。ぜひ多くの人と出会って話し、たくさんの情報を取り入れ、充実した日々を過ごしてください。皆様の学生生活を心から応援しています。

研究成果の社会実装には、 技術だけでなくニーズを意識することの大切さを学んだ

小山 智己さん (2016年度採択)

研究課題名
「メタン発酵消化液を用いた高栄養価微細藻類の培養」

2017年環境情報学部卒業後、神戸大学大学院科学技術イノベーション研究科博士課程修了(博士: 科学技術イノベーション)。学位取得後は国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)のイノベーション戦略センターにて研究企画業務に従事後、江崎グリコ株式会社に入社。おいしさと健康を両立する食品素材の開発に取り組む。



生物資源の利用可能性を探索し続け、 食品業界へ

課題研究のテーマは、燃料・食糧源となる“藻類”の低コストでの培養でした。藻類は光合成によって二酸化炭素を固定し、燃料として利用可能な“オイル”を細胞の中に蓄えます。このオイルは航空業界からのニーズが高く、高品質な栄養素を含んだ残渣は家畜・養殖飼料分野等への応用が期待できます。しかし、藻類が作り出す物質は生産コストが高く、普及が限られています。その解決のため工業廃水を使い、安く藻類を培養できる方法を探索していました。

大学院では引き続き、航空燃料(SAF)原料の効率的な生産と事業化について研究し、NEDOでは脱炭素社会の実現及び産業技術力強化に資する研究開発プロジェクトの企画・立案業務に取り組みました。その業務を通じ、藻類などの「生物資源」が最も価値を発揮できる領域が食品業界だと感じ、江崎グリコに転職しました。今後は一企業研究者として、将来の市場・消費者ニーズを理解しながら、藻類という資源を普及させていきたいと思っています。

他分野の学生との交流や先達からの アドバイスにより新たな視点を獲得

私は、山岸学生プロジェクト支援制度を通じて、研究成果の実装には技術面だけでなく、他の要素も考慮する重要性を学ぶことができました。私の研究では藻類を屋外で人工培養する必要がありましたが、その際に不足していた生物多様性への影響という視点を、懇親会での他の学生との会話で気づくことができました。以後、生物多様性を崩壊させない為に微細藻類をどのように取り扱うか?といった観点も含め研究を行えるようになりました。また、懇親会では山岸様から「価値(ニーズ)起点での研究開発を行うことが大切だ」という貴重なアドバイスをいただきました。当時学部生だった私は、研究で良い結果を出すという事ばかりにとらわれていましたが、「自分の研究は誰にどのような価値

を提供できるのか?」という事を考えながら研究を行うようになりました。研究成果を社会実装する為には、「誰のどのような問題を解決するか(ニーズ面)」という視点と「問題を解決する為にどのように研究開発を行うか、オリジナリティがあり実現性のある研究開発をどう行うか(技術面)」という2つの視点が必要だと感じています。山岸様との会話を通じて、技術ばかりに囚われるのではなく、ニーズを意識した研究を実行する大切さを学ぶ事ができ、現在の業務にも役立っています。

研究の魅力は、興味を追求・表現し、 サイエンスに貢献できること

研究は自分の興味を追求し、考えを表現できる点がおもしろく、さらに仮説、検証、実験、考察で得られた成果によって、サイエンスの発展に一步貢献できる点が魅力です。SFCは多くの研究会がありますから、ぜひ自分の興味の対象を見つけてください。私自身たまたま富田勝教授が行っていた講義を受講し、藻類の可能性に惹かれました。その後、鶴岡市の先端研にて研究に没頭させていただきました。また、本制度を通じて研究の金銭的援助だけでなく、すばらしい方々と出会う機会をいただき、刺激をもらいました。研究の環境も整っているかつモチベーションを高く保てる環境はSFCならではの環境だと思います。



費用対効果にとらわれず、自由な発想で 社会課題解決に取り組むことが大学研究の使命

水島 知央 さん (2016年度採択)

研究課題名
「乗合型自動運転車の運行管理システムの構築」

2017年3月に環境情報学部卒、2019年3月に政策・メディア研究科卒。同年4月に外資系コンサルティング会社入社。製造業向けのデジタル変革をサポートする部署に所属し、エネルギー企業や物流企業、自動車企業に対してのコンサルティング活動に従事。



少子高齢化社会における 新たな移動手段の実現に向けた研究

私は学部2年次から、自動運転をテーマとする大前学先生の研究室に所属していました。大前研では、国の自動運転実証プロジェクトを担当し、全国各地で自動運転の公道実証実験をサポートしました。

研究の目的は、少子高齢化に伴う乗合バスの代替手段として、自動運転車の長期運用を実現することです。具体的には、運用コストやメンテナンスの問題を特定し、解決策を見出すことを目指しました。これに向けて、130km・13時間に及ぶ自動運転車の長期周回実験を実施し、運用面での問題提起と解決に取り組みました。

卒業後は、自動運転技術のような革新的な技術が多くの企業に前向きに検討・導入されるようサポートすることが、社会全体の幸福に寄与するという信念のもと、コンサルティング会社に所属し、さまざまな企業の問題解決を支援しています。たとえば、新技術のトライアル実施や新デバイスを使用した実証実験のサポート、製造業の製造工程の効率化・改善などを行っています。

実社会での費用対効果重視の壁を 越えるために挑戦したい

現在の仕事においては、クライアントに対して費用対効果が常に重要なKPI(重要業績評価指標)として求められています。そのため、どれほど有用な技術であっても、この基準を満たさなければ導入は難しいというのが現実です。

たとえば、自動運転技術は社会に大きな価値をもたらすとされますが、1人のバス運転手を置き換えるために数千万から数億円を投資することに対して、その金銭的なメリットを明確に示すのは非常に困難です。業務の中で自動運転技術が問題解決に役立つ場面もいくつか見受けられるものの、費用対効果のKPIを達成できない上に、導入に伴うリスクの方が大きいと判断されています。

私の今後のチャレンジは、費用対効果を求めない社会課題の解

決方法としての自動運転技術の実社会への適用の実現と、多くの人の移動のサポート実現への取り組みです。直近では、現在の会社内で大きな権限を持てるポジションを確立し、ソリューションの一つとして自動運転技術を多くの企業に導入することで、企業の問題解決を実現したいと考えています。

助成金などのサポートが 社会課題解決に向けたSFC生の研究を後押し

山岸学生プロジェクト支援制度は、私自身の個人研究に対する初めてのスポンサーであり、費用対効果を問わない点が特徴でした。そのため、社会全体に対してインパクトや価値を示すことに重点を置き、強いモチベーションを持って研究に取り組むことができました。SFCが重視している社会課題の解決方法や技術は、費用対効果を示すのが難しい場合が多く、民間企業では後回しにされがちです。しかし、これらの課題に対する解決策を追求することが大学の研究の使命であり、費用対効果にとらわれずに社会課題解決を支援する本制度こそ、SFCの本質であると考えます。

学生の皆さんには、SFCで取り組んだ研究の成果を忘れずに就職活動に臨んでほしいと思っています。柔軟な考え方やアイデアで問題解決を目指し、固定観念にとらわれない発想を持って社会人生活を送ることで、SFC生らしい、より良い人生を実現できると信じています。



学部生時代から培ってきた知見と技術を生かし、 システム生物学分野の進歩に貢献したい

山本 楠さん (2016・2017年度採択)

研究課題名
2016年「超高速タンパク質相互作用ネットワーク解析手法の拡張」
2017年「異種間タンパク質間相互作用解析による複合体形成解析」

2018年4月から慶應義塾大学修士課程、2020年4月から慶應義塾大学博士課程に学籍を置き、カナダ ケベック州 Laval 大学 Landry 研究室に留学し、システム・バイオロジーを駆使した分子進化の研究に従事。2024年3月学位取得。以降システム・バイオロジー研究機構にて同分野の知識を製薬会社研究開発部門等との協働を通して実社会へ応用。



博士課程進学に迷っていた学部生時代、 支援制度採択が大きな励みに

SFC 入学時からバイオ系の研究をしたいという思いがあり、学部1年生の秋学期に先端生命科学研究会の門を叩きました。さまざまな研究領域がある中、同研究会の卒業生でもある谷内江望特任准教授(当時)が新しく東京大学に研究室を立ち上げるということで交流研究生として受け入れていただきました。同研究室では合成生物学的アプローチで細胞に遺伝子回路等を導入し、いわばプログラミングすることで細胞システムを理解するための手法開発に取り組んでいました。

山岸学生プロジェクト支援制度に関連する研究は、谷内江先生が留学時代に開発したタンパク質間相互作用を高速同定する手法(バーコードフュージョン遺伝学)について、試料作成の効率化と、その手法を用いて異種のタンパク質間相互作用から分子進化を解析することでした。

当時、博士課程進学を念頭に、一から研究について学び、日々優秀な同期や大学院の先輩方に必死に追いつこうと背伸びをして頑張っていました。正直なところ自分にこの道が向いているのか迷う時もありました。そのような時に、本支援制度で助成いただいたことが大変励みになり、進学する意志を固める一因となりました。

ノーベル賞級の研究成果に 貢献できるような仕事をしたい

現職のシステム・バイオロジー研究機構は民間の研究機構です。生物をシステムとして捉えるシステム生物学の視点から、科学的発見の原動力となるようなツール等の開発を行っています。アカデミックな活動では、情報解析プラットフォームの構築や、人工知能を活用した科学論文の解析等について取り組み、論文や学会等で研究内容を発表しています。企業等との活動では専門性を活かしたデータ解析やプラットフォーム・フレームワークの構築を行っています。



これまで培った分子生物学・システム生物学分野の知見は、さまざまな技術と組み合わせることで相乗的な価値を創造できると考えています。今後挑戦したいのは、めざましい進化を遂げる人工知能等を用いて分子生物学・システム生物学分野の新たな発見や分野を開拓することです。現在、分野全体でノーベル賞を獲得できる研究に匹敵する成果を生み出せるような自律的な人工知能の開発が進められています。私はシステム生物学の分野でそのような大きな目標に貢献できる仕事をしたいと考えています。

専門性が異なるメンバーの協働が、 困難な社会実装への道を拓く

研究を社会実装しようとした時、実社会はとても複雑なために、一人あるいは一つの視点だけでは何も成し遂げられません。必然的に企業共同研究や協働においては、専門性が異なるメンバーと日々新しい分野や題材に取り組むこととなります。その過程で特に研究を通して培った知識・スキルを活かし、チームに貢献できた時に大きなやりがいを感じます。

今、SFCの学生の皆さんは、ぜひ打ち込むことを見つけてとことん時間をかけてください。テーマや分野を変えたりすることも多いかと思いますが、途中で打ち込むことは変わっても大丈夫です。一見無駄に感じるかもしれませんが、回り道のような経験がのちのち必ず生きてきます。応援しています。

研究姿勢のみならず 生き方にも大きな影響を受けた、支援制度への挑戦

川那子 進太郎さん(2017年度採択)

研究課題名
「ユーザ行動に基づく身体動作によるロボットの性格付与」

2018年3月総合政策学部卒業後、2018年4月～2020年12月、金融系システムインテグレータでシステムエンジニアとして金融機関向けシステムの開発・保守に従事。2021年1月～現在、コンサルティングファームにて、コンサルタントとして保険業界向けのITコンサルティングに従事。



助成金によって思い通りの環境で 研究に取り組み、研究成果を学会で発表

学部生時代の研究の大きなテーマは、人とコミュニケーションするロボットについて、個々のロボットに異なった性格付けを施すための手法です。

具体的な研究内容としては、心理学的な人の感情モデルをベースに、独自のロボット性格プログラムを作っていました。過去のコミュニケーションの履歴を元にロボットの感情の動き方が変化し、その差が、コミュニケーションの相手にとってはロボットの性格として感じられるというものです。実験では、プログラムをロボットに組み込み、人とロボットで、タブレット端末を通じて簡単なコミュニケーションをしてもらいました。コミュニケーション次第で、ロボットのジェスチャーから受ける印象が変化し、コミュニケーションもより自然で楽しいものになるという結果が得られました。

山岸学生プロジェクト支援制度に採択されたことで、助成金によって実験用のタブレット端末まわりの環境を整えるなど、ロボット研究のネックである開発部分をクリアし、研究の実現性の意味で大きなプラスでした。それに伴い、研究に対するモチベーションが向上するとともに、助成金をいただいた研究なので、きちんとその成果を外部に発信し、社会に還元したい、知見を共有したいという意識が強まりました。学会の発表に必要な旅費も助成金で賄うことができたので、自身で得た予算を使って研究から発表まで行うことができ誇らしかったです。

大学時代に得たテクニカルフレームと マインドが、今も人生の軸に

大学生活ではプログラミングをはじめとするIT関連の事柄に触れることが多かったため、就職はIT分野を検討し、キャリアと私生活の両立を考えた結果、システムインテグレータへの就職を決めました。システム開発の仕事をする中で、顧客の課題解



決のために、より上流の企画から携わっていきたいという思いが強くなり、コンサルタントへの転職を決めました。一見、大学時代のロボット研究とはかけ離れているようですが、研究で培われた「課題発見・解決」プロセスは大いに役立っています。何より支援制度によって、やりたい研究をやりたいようにやるという経験をさせていただいたお陰で、今は自信を持って、仕事でもプライベートでも自身の可能性のままに生きていくことができます。私生活ではリモートワーク中心にして夫婦で子育てをし、成長を楽しむと同時に、趣味の音楽制作にも力を入れています。

遠回りを恐れず、「やりたいこと」 「なりたい姿」への直感を信じる

私からSFCの学生の皆さんにアドバイスできることがあるとすれば、「直感を大事にしてください」ということです。直感というのは、自分の内部から出てくるシグナルですから、それを理屈や論理で押さえ込んで無視をすると、自分が本当に「やりたいこと」・「なりたい姿」から遠ざかることになってしまいます。また、もし「やりたいこと」・「なりたい姿」がぼやけている場合でも、自分の直感に従って動いていれば、近づいていくことはできるはずです。学生時代はあっという間ですが、その後の人生に大きな影響があります。皆さんにはぜひ、自身の直感に従い、充実した時間を過ごしていただけるように願っています。

支援制度への挑戦が、 研究者としての大きなターニングポイントに

原 あゆみ さん (2020・2021年度採択)

研究課題名
2020年「ガンマ帯位相同期に着目した顔認知能力の神経相関」
2021年「ガンマ帯位相同期に着目した人物認知能力の神経相関」

2022年3月総合政策学部卒業、2022年4月に京都大学大学院人間・環境学研究科入学、2024年3月に同研究科を修了し、同年4月に日本ロレアル株式会社に入社。リサーチ&イノベーションに配属。



脳活動のパターンから 顔や人物の認知について研究

山岸学生プロジェクトに採択された研究は、個人の顔記憶能力のバイオマーカーとなりうる脳活動パターンを明らかにするための脳波を用いた心理実験です。具体的には、高周波の脳活動の違いに着目して、顔記憶能力の個人差を検証していました。実験では、顔を視覚刺激として用いた錯視画像を提示している際の脳波を計測し、高次の認知処理に関連するとされる高周波（ガンマ周波数帯域）の活動を調べました。各実験参加者には、事前にオンライン上で顔記憶能力に関する心理課題に取り組んでもらい、そのスコアと脳活動との関連を確かめました。

コロナ禍で失いかけていた研究意欲を、 支援制度への挑戦で取り戻す

当時は突然始まったコロナ禍で、とにかく辛く苦しい日々でした。1年以上準備をして内定した交換留学はメール1本で白紙になり、キャンパスには入構すらできなくなりました。自分の力ではどうすることもできない状況に打ちひしがれるばかりで、研究への意欲を失いかけていたところ、研究室の先輩に出願を勧められたのが、この支援制度でした。

出願書類を作成する中で、自分が研究を通じて明らかにしたいこと、実現したい価値を再確認することができ、気持ちが前を向いていくのを感じました。採択いただいた時は、自分の研究が認められ、背中を押してもらえたような気持ちがしてとても嬉しかったのを覚えています。

また、大学で基礎研究をしていると、学術的な価値について深く考える機会は多くある一方で、それが日々の生活レベルでどのようなインパクトをもたらしているのか、という点は見落としがちです。出願過程で「研究の社会的インパクト」という視点を養うことができたのはもちろん、他の採択者との交流で、実社会運用への意欲を高めることができました。この経験が、修士以降のキャリア

を決める際、研究をライフワークにする選択肢としてアカデミアだけでなく、企業の研究職を考えるきっかけになりました。

大学での「顔」研究で得た知見を、 人の感性に寄り添った化粧品づくりへ

私の研究の原動力は、「言語コミュニケーションを越える、非言語コミュニケーションを実現したい」という気持ちです。言葉では伝えきれない感情を、別の形で伝えることができれば、私たちはお互いをもっと深く理解することができるはずだと思っています。大学での「顔」研究は、表情や顔立ちなど、人が社会的な交流をする上で重要となる非言語的な情報が、どういった認知に支えられているのかを明らかにするための取り組みでした。今後は、認知研究の知見を化粧品開発に活かすことで、より人の感性に寄り添った製品づくりを実現したいと思っています。

私は研究を諦めかけた経験が、研究者としてのキャリアの出発点になりました。研究を志すとき、その道があまりに険しいと感じることが誰にでもあると思います。山岸学生プロジェクト支援制度からは、研究費の援助だけでなく、不安な状況下で研究に励む学生と切磋琢磨する機会をいただきました。自分を支え励ましてくれる人たちがいると気づけたことが、私が今日まで研究を続けてこられた理由です。皆さんも open-minded を心がけて、研究の道を拓いてください！



SFCの豊富なリソースを活用して 「ときめき」を探求し続け、事業化を実現

山本 愛優美さん (2021・2022年度採択)

研究課題名
2021年「バイタルデータ可視化によるポジティブ情動認知と伝染」
2022年「心拍情報共有によるポジティブコミュニケーション促進」

学部4年生の2022年10月に株式会社e-lamp.を設立、2023年3月に環境情報学部卒業、現在、同メディアデザイン研究科(修士課程)在学中。



学部生時代の研究をもとに起業し、 現在は研究と並行して事業を展開

現在e-lamp.社では、「“ときめき”で溢れる世界を作る」をビジョンに、脈拍を用いたコミュニケーション促進ツールの開発をしています。特に脈拍を用いた婚活・マッチング促進支援ツール「HeartDate」、脈拍を可視化するイヤリング型デバイス「e-lamp.ONE」の開発、その他拡張性の高いプロダクト開発に注力しています。

また、研究では、慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科の南澤研究室に所属しながら、自分自身の事業と研究を並行して進めています。例えば、2023年に行われた「Boiling Mind」のプロジェクトでは、ダンサーとお客様が同時にe-lamp.ONEを着用するプロジェクトを実施しました。

研究室での指導と経験が、 探求テーマ「ときめき」の事業化につながる

私自身は、地元の北海道・帯広市で高校生起業家として複数の事業立ち上げを経験しました。その際に、自分自身を強く動かす「ときめき」を数多く経験したことから、その感情を探求したいと思うようになり、SFC入学を決めました。

大学2年生の時に自分の研究目標との親和性を感じた森将輝研究室に所属しました。森先生の温かな指導や研究室の学生とのディスカッションで得た経験が、今の私のプロダクトの着想・開発・事業化・研究につながりました。

e-lamp.社の起業にいたるまでは、研究・開発・事業化のタイミングで多くの方に関わっていただきました。現在のメンバーは、大学の授業や友人や友人の紹介、元クライアント、研究室、イベント登壇、メディア出演など、さまざまなきっかけでジョインしました。SFCのコミュニティでは、特に所属していたサークルや特プロ、研究室(森将輝研、琴坂研、高汐研、横田浩一先生の自主ゼミ)などに助けられました。

今後は、博士課程にも進みながら、自分自身の興味のある「とき

めき」研究を続けていき、そこで得られた知見を生かしながら、会社も成長させていければと思っています。

支援制度は、自分の研究を 社会実装に向けて進める貴重なチャンス

山岸学生プロジェクト支援制度の存在は、採択された先輩のSNS等を通して入学当初から知っていました。自分の研究を社会実装できたらおもしろそうだと思っていたものの、研究の初期フェーズで学部生に支援が行われるケースは多くないため、本制度はとても貴重なものでした。2021年度と22年度に採択された、「バイタルデータ可視化によるポジティブ情動認知と伝染」「心拍情報共有によるポジティブコミュニケーション促進」は、どちらも現在の事業につながるe-lamp.の開発並びにその影響評価を行う研究です。

本制度では、報告会で他のSFC生の学際的な研究を知ることもできます。自分がこれまで知らなかったバイオ分野や社会学分野の研究など、とても新鮮な気持ちで聞かせていただきました。このコミュニティをきっかけに、いつか採択者同士のコラボレーションが発生したら、新たな価値を生み出していけるのではないかとワクワクします。在学期間に本制度にチャレンジしたことは、現在にも続くとても良い機会でした。SFCには本制度をはじめとする素晴らしいチャンスが溢れているので、在学生の皆さんには、好奇心の赴くままに行動することをオススメします。



気象で生活を豊かにし気象で命を落とす人が いなくなるよう、リテラシー向上に努める

桐山 大和さん(2021・2022年度採択)

研究課題名
2021年「線状降水帯の併合による発達メカニズムの解析」
2022年「九州北部豪雨における線状降水帯の災害特性」

2023年4月に株式会社ウェザーニューズ入社、同年7月に予報センター配属。モバイルインターネット事業部、放送気象事業部、および自社ライブ放送向けの予報コンテンツ作成運営。2024年5月から上記に加え、予報センター内の海象センターにも所属。航海気象事業部向けに世界の海上荒天情報の作成および運営にあたる。



航空部で“空”が好きになり、 気象学への一歩を踏み出す

もともと自然科学や災害に関心があったため、SFCに入学しました。体育會航空部に入学し、エンジンを持たないグライダーと呼ばれる機体を操縦していたことで、空への興味が一気に高まりました。また、1年生の秋学期に聴講した宮本佳明准教授の気象学研究会の雰囲気素晴らしかったことから、気象学の道に進みました。その中で、大災害を引き起こすにもかかわらず予測が難しい“線状降水帯”を知り、災害気象に特化した研究を始めました。

卒業後は、民間気象情報会社のウェザーニューズ・予報センターに所属し、主にアプリ内の予報コンテンツの作成や運営をしています。天気は24時間動き続けるため、予報センターも24時間稼働し、台風や大雨が予想される時は、荒天のピークや時間帯を正確に伝えています。突如として発生し予測の難しい「ゲリラ雷雨」には、アプリユーザーの皆様からいただく天気報告や自社ライブカメラ・気象データなども駆使して、その予測を実現しています。さらに、航海気象事業部向けに世界の海上荒天情報の作成にもあたるなど、日本の天気から世界の海まで、幅広く携わっています。

気象災害による人命や 経済活動への被害を防ぐ情報発信を

社会人2年目となった現在、ウェザーニューズ経由で災害ボランティアに行く機会もあり、現地の被害状況を確認しつつ、被害に遭われた方々からお話を聞く機会も増えました。気象にかかわらず災害は一瞬にして日常を奪ってゆくため、普通の生活が続くことへのありがたさや、そのような日々を守ってきたいという想いは学生時代から、より一層強くなりました。地球温暖化の影響で気象災害の激甚化が進み、世界中で人命や経済活動に多大な影響が生じています。気象災害を受けて“こんなことになるとは思わなかった”と思うことがないように、情報



を発信していきたいです。

ただ、見上げる空には美しい現象や綺麗な現象がたくさん存在しています。上手な空との向き合い方や空の魅力もたくさん伝えていくことで、一人ひとりの気象や災害リテラシーの向上と底上げを目指し、気象から生活を豊かに、そして気象で命を落とすことがない世の中にしていきたいです。

支援制度によって研究の質の向上とともに、 人との出会いが広がった

私は学部生時代、2年にわたり山岸学生プロジェクト支援制度を受けることができ、研究の質やモチベーションの向上、そして現在の進路や自信につながりました。また、他の参加者の研究を知ることで自分の視野をさらに広げることができました。2年目の支援制度で知り合った同期とは今でも連絡を取り合う仲間です。学生時代にこのような知見と人の輪の広がる貴重な支援をいただけたこと深く感謝しております。

最後に学生の皆さんへ。SFCは、自分の興味をとことん極めていくことができる環境が本当に整っています。私は、生まれ変わった後でもSFCに入りたいと本気で思っています。気になっていることがあれば、なんでも飛び込んでみてください。それがたとえ遠回りだったとしても、その途上で出会える学びや仲間、卒業後も大きな財産となっていきます。

10年を振り返って



山岸さんにしかできない 学生との「かわり」方

高汐 一紀 環境情報学部 教授

加藤(文)先生の後を引き継いで、山岸学生プロジェクト支援制度担当となったのが2015年秋。いまでも毎学期の成果報告会に呼んでいただいています。山岸さんは、ご自身の経験から「学生個々のプロジェクトを直接支援したい」のだと言います。学部生が進める研究プロジェクトを直接支援する制度は、他に類をみません。

なぜSFCを推してくれるのでしょうか？ ご存じの通り、SFCの3学部2研究科が対象としている研究領域は多種多様、文字通り多岐にわたります。そんなSFCの教員・学生に一貫しているのは「社会に実装してこそサイエンス」という認識。ビジネスの世界でのファウンダとしての経験を持ち、現在は慶應イノベーション・イニシアティブ代表取締役社長として、数々の大学発のベンチャーを支援し続けている山岸さんも、この思いは同じなのでしょう。山岸さんはいつも、支援した学生一人ひとりに声をかけ、「これから」の話聞いてくれます。本制度が支援する学生には、この「社会に実装して還元する」ことを念頭に、自らの手で未来を切り開いてほしいと思います。そしていつか、卒業生の中から次の山岸さんが現れることを強く願っています。



SFCの学部生研究のレベルアップに 多大な貢献をしてくれる 唯一無二のプロジェクト

宮本 佳明 環境情報学部 准教授

初めて本プロジェクトの存在を知った時、驚いたことを覚えています。一般的に学生に対する研究支援というと、特に博士課程の大学院生を対象とするものが多く、学部3・4年生が対象というのは衝撃的でした。しかも資金使途の自由度が高く、事務的な負荷が低いという、学生が萌芽的な研究を行う上では理想的で、学部学生を対象としたこれだけの支援は、極めて稀と思います。SFCでは学部生のうちから優れた研究成果を出す人も多いのですが、その中には本プロジェクトで支援を受けた研究が多く存在します。

そして本プロジェクトの担当になり、山岸さんとも接する機会を多く得ることができ、プロジェクトの経緯や意義を知りました。山岸さんは非常に紳士的な方で、採択者に対して常に真摯に対応されていて、本プロジェクトが魅力的である理由は山岸さんのお人柄によると思っています。本プロジェクトが始まって10年が経ち、既に実際に社会へ影響を与えた研究・卒業生がはじめており、今後さらなる発展に向けて、私自身少しでも貢献できればと思っています。

春学期採択者の1年の流れ

5月中旬

応募

学生は、事前に公開される応募要領などで募集情報を確認し、各自の研究テーマ、研究を進める意義、また、研究計画や資金計画などを盛り込んだ応募書類を提出します。

7月初旬

採否通知

厳正な審査を経て、採否が決定します。採択者には夏季休校期間前に助成金が支給され、ここから学生はより一層研究を深めていくことが可能になります。

11月下旬

中間報告

研究成果の中間報告として、例年11月下旬にSFCにて開催されるOpen Research Forum (ORF) にてポスター展示を行い、研究の途中経過を発表します。



2月初旬

最終発表プレゼン

最後に、1年の研究成果を報告する成果発表会を三田キャンパスで開催します。寄付者である山岸氏から、研究成果に対して個別にコメントも伝えられる貴重な機会です。また、発表後に行われる採択者、教員、山岸氏も参加する懇親会では、研究分野を超えた交流が行われています。



※10月下旬に秋学期募集があります。

過去の研究課題名一覧

2013

- ・センサRFタグのメモリ領域からの高速データ取得
- ・RNA編集サイトの汎用的かつ高精度な検出手法の開発
- ・辺野古の海を守る人ドキュメンタリー映画制作
- ・ドキュメンタリー映画「Super View」の創作
- ・日本におけるメディカルツーリズムの推進
- ・自然融和型インタラクティブメディア表現の研究
- ・都内・特定区における地域包括ケアの実態と課題の分析
- ・自転車フレームのパーソナル・ファブリケーション
- ・細胞シミュレーションによる赤血球の分化過程の解析
- ・児童養護施設における社会的課題
- ・肺癌における抗がん剤耐性獲得までの経時的な解析
- ・仮設住宅における高齢者の生活不活発病への働きかけ

2014

- ・クマムシのmiRNAから辿る進化のダイナミクス
- ・小さな空間での人の振る舞いからみる地域参画の設計
- ・腸内細菌由来RNA刺激によるLPS刺激寛容メカニズム解明
- ・GPS信号の複数ノードによる分散取得手法
- ・metamoCrochet: 感温変色素材を用いた編み物
- ・震災復興における集団移転団地の住みやすさ評価
- ・高度オイル産生藻類における脂質蓄積時の代謝の解明
- ・生物学応用に向けた微生物増殖制御機構の開発
- ・農漁業共創型コミュニティ形成のための支援ツール開発
- ・子宮移植についての看護学生を対象とした意識調査
- ・パキスタンの学力の決定要因は何か
- ・インフラ誘導型自動運転システムに関する研究
- ・時計遺伝子がツメガエルの初期発生に与える影響の解析
- ・先住民生活様式から学ぶ環境共生型建築デザインの提案
- ・視覚障害者を支援するポータブルデバイスの研究
- ・注意のモダリティを切り替える神経回路モデルの構築
- ・素材特性を応用した新しい実体ディスプレイ表現の研究
- ・メタボロームデータに基づくカンジダ菌の代謝解析
- ・抗酸化成分アスタキサンチン産生藻の代謝生理学的比較
- ・SLSによる4Dプリント素材の探求
- ・喪失の芸術
- ・Japan and Migrant Learning
- ・開発途上国・スラムの火災後の住民組織と生活再建

2015

- ・「たかまつなな」の分かりやすいニュース」番組の提案
- ・臨床研究中核病院における患者支援機能に関する研究
- ・脳卒中片麻痺患者への新規歩行リハビリテーション開発
- ・高精度に腎機能を予測する新規バイオマーカーの探索
- ・合成生物学を応用した持続可能なファッションの検討
- ・先天性筋ジストロフィーの新規メカニズム解明に向けて
- ・海苔機能性成分が腸内細菌叢に及ぼす変動の経時的解析
- ・建築や素材に活かす編み物の技法の研究
- ・「活火山と生きる、口永良部島の「協働」生活」の出版
- ・多様なスイッチに適応可能なデバイスの開発
- ・音楽聴取時の脳における情動処理について
- ・複数の国際標準に対応した実空間情報統合収集システム
- ・皮膚になる細胞から完全な生命体を造る技術基盤構築
- ・クマムシの染色体損傷応答解明に向けた経時的発現解析
- ・視覚・身体的言語をもとにした創造ツールの開発と実践
- ・パーソナライズドプロバイオティクス開発に向けて
- ・Cross-cultural comparison on neural processing of facial recognition between Japanese and foreigners
- ・ジュニア・アスリートのスポーツ障害予防に向けて

2016

- ・路車協調型完全自動運転システム
- ・身の回りのものを用いたロボティクスオブジェクト
- ・ヒトにおける大脳前庭野の同定と統合機構の解明
- ・メタン発酵消化液を用いた高栄養価微生物培養
- ・里山環境における汎用な両生綱保全手法の確立
- ・器械体操選手の人間離れた運動制御の解明

- ・シジュウカラのさえずりにおける地理的変異と種分化
- ・肺癌細胞におけるTGF-β誘導性上皮間葉転換の代謝特性
- ・ラントポロジ型CACC
- ・スベリヒユのドーバミン関連代謝物の解明
- ・データ属性分類の因子・特徴量抽出計量システムの実現
- ・コンゴ民主共和国の建築における布の有用性の研究
- ・イネにおける発芽と代謝の関係性の解明
- ・人間の感情や行動に影響を与える口内拡張技術の研究
- ・乗合型自動運転車の運行管理システムの構築
- ・実践共同体論に基づく防災教育実践の考察
- ・ハードウェアによる非圧縮4K映像IP伝送装置の実装
- ・四肢麻痺患者のための身体表現力増強ロボット
- ・昆虫食・カイコカ摂取による抗肥満効果の検討
- ・ネパール震災における小型CNCを用いた復興支援
- ・タンパク質運送技術を用いた有用物質生産にむけて
- ・HIV-1 ASP遺伝子の配列比較と発現の解析
- ・超高速タンパク質相互作用ネットワーク解析手法の拡張
- ・珠算式暗算における熟達者と未習者の脳情報処理の相違
- ・Clarify the effect of Barley Water on host health
- ・過疎化が進む田根地区の空き家改修による地域再生研究

2017

- ・小田原市の果樹園地域における獣害対策の実施
- ・ユーザ行動に基づく身体動作によるロボットの性格付与
- ・自由行動下における乳幼児の好奇心に関する脳機能解明
- ・GABAの脊椎動物の胚伸長に対するOmics評価
- ・ササキ類の生活史及び生息環境に関する研究
- ・人間の視嗅覚連合処理の解明
- ・予測された新規バクテリアClp1の実験的検証
- ・自動運転技術を用いた運転技能学習支援システムの開発
- ・米ぬか摂取による大腸炎抑制機構の解明
- ・主体的交通モード選択に向けた局地的混雑推定法の構築
- ・RNAウイルスの増殖を抑制するマイクロRNAの探索と創生
- ・哺乳動物における細胞系譜丸ごと追跡技術の開発
- ・異種間タンパク質相互作用解析による複合体形成解析
- ・留学生主体の大学改善のための組織モデルの研究
- ・空撮写真と地理情報による迅速な土地被覆の機械分類
- ・日本の都市環境の微生物群集調査GoSWABプロジェクト
- ・腸内細菌の機能解明に向けた基盤技術の開発
- ・希少糖が有する抗肥満効果における腸内細菌叢の役割
- ・藻類の倍數化によるバイオマス生産量改良の検討
- ・クリスパーキャス法を用いた哺乳類胚の脊索形成の解明
- ・DigiFAB連携STEM教育ロボットキットの開発
- ・過疎が進む田根地区での空き家改修による地域再生研究

2018

- ・Thermal Feedback Influencer
- ・性的指向に関する脳機能ネットワークの解明
- ・蘭嶼の露店経営ヤミ族のライフストーリーと意識調査
- ・ナラティブによる地震防災情報伝達の効果検証
- ・ベトナムの障害児の日常と「社会化」
- ・難培養性腸内細菌の機能解明に向けた基盤技術の開発
- ・極限環境の生物群集調査「GOBI.OME 2018」
- ・リーディングタッチ：体に呼びかける注意誘導システム
- ・体操競技選手の同側運動経路使用の検証
- ・クリスパーキャス法による哺乳類胚の細胞集合能力解析
- ・路上の建築から学ぶ建築設計の可能性
- ・小児移行期医療における看護アプローチ
- ・小田原市石橋地区の果樹園における獣害対策の実施
- ・寄生アリであるトゲアリの潜在的な寄生可能域の解明
- ・マヌカ蜂蜜摂取による大腸炎抑制メカニズムの解明
- ・免疫系の強化に向けた細胞性免疫活性化機構の解明
- ・SLEおよび免疫老化における絶食効果の検討
- ・個別化ヘルスケアの実現に向けた腸内環境研究
- ・A sensing system for garbage disposal information
- ・イカ文化歴史学—日本人とイカの歴史上の関係を紐解く
- ・都市環境の微生物コミュニティ調査GoSWABプロジェクト
- ・都市への適応による蝶類2種の形態的・遺伝的変化
- ・腸内細菌叢に着目した睡眠障害治療法の確立

2019

- ・社会寄生アリであるトゲアリの宿主識別物質解明
- ・矢印の形状がもたらす人への移動影響の検討
- ・無毒アオコ突然変異体の作成
- ・マヌカ蜂蜜摂取による大腸炎抑制メカニズムの解明
- ・自然言語における不確実性を考慮したメタ学習
- ・免疫老化およびSLEにおける絶食効果の検討
- ・生物多様性を視覚化する為の情報提示方法の開発と提案
- ・建築・都市空間における「かちなきかたち」の可能性
- ・バクテリアにおけるtRNA遺伝子クラスターの進化解析
- ・都市映像の保存・共有のための匿名化手法の提案
- ・コンビニの食品廃棄から開く社会の未来
- ・ModuRo:ソフトロボットのプロトタイピング環境
- ・グループIIイントロンの網羅的同定および系統解析
- ・ナス科植物の全葉切断断差の種間差の原因経路の推定
- ・経頭蓋電気刺激による腹話術効果の阻害
- ・ビタミンB6を用いた夢メカニズムの解明
- ・大規模ゲノム改変で解明するバクテリアゲノムの可塑性
- ・出芽酵母を用いた異種タンパク質の機能解析系の確立
- ・麹菌の自主増殖抑制機構を解除する遺伝子の決定
- ・空間内へ溶け込むテレプレゼンスロボットの実装・評価
- ・災害復興過程への住民の直接参加の実現要因
- ・睡眠不足がもたらす腸内細菌叢変動の網羅的解析
- ・想起音のピッチに特異的な神経活動の同定および識別

2020

- ・フィギュアスケートにおけるエレメントの認識
- ・うつ病と腸内細菌叢との相互関係の理解に向けた研究
- ・Pyrococcus furiosusの熱ストレス応答機構の解明
- ・台風縁近域における乱気流の出現可能性を探る
- ・経頭蓋電気刺激による多感覚統合の阻害
- ・歌唱による前頭葉実行機能の活性化
- ・3Dプリンタを用いたより快適なイヌの義足の製作
- ・睡眠不足による免疫力低下のメカニズム解明
- ・ゲノムデザインに向けた最小限のモチーフ配列の探索
- ・トランスオミクスによる免疫細胞の代謝変動機構の解明
- ・異種発現を用いた細菌RNAシャペロンHfqの機能解析
- ・人工筋肉を用いた触覚歩行ナビシステムの提案
- ・先端ゲノム編集技術を用いた麹菌の増殖制御因子の決定
- ・ガンマ帯位相同期に着目した顔認知能力の神経相関
- ・エアロゾルの湿性除去メカニズムの解明
- ・日本のダウンバーストの統計解析
- ・テレプレゼンスロボットにおける身体的存在感の向上
- ・両生類胚におけるTarget-ACEの有効性確認
- ・卒業制作「見立てを用いた不用品の再解釈と実践」
- ・国際宇宙ステーションの微生物群集特徴解析
- ・Clarifying mutations in vpu proteins
- ・アルゴリズム・ロボットデザイン手法の開発

2021

- ・官僚組織におけるデザイン思考導入に向けた基礎的分析
- ・ガンマ帯位相同期に着目した人物認知能力の神経相関
- ・多点光源による実体質感の研究：スパンコールを例に
- ・クマムシの乾眠関連遺伝子のプロモーター領域解明
- ・フィギュアスケートにおけるエレメント認識
- ・老化細胞除去による自己免疫疾患の病態改善
- ・台風縁近域の乱気流の発生可能性と台風強度の関係性
- ・睡眠不足による免疫応答変化のメカニズム解明
- ・骨粗鬆症の制圧に向けた病態形成メカニズムの解明
- ・デバイス内センサで取得した気圧データの利活用可能性
- ・深海微生物による二種類のプラスチック可塑性の分解
- ・ユーザと対等な関係を築く対話システムの実装・評価
- ・線状降水帯の併合による発達メカニズムの解析
- ・GABAが導く体軸伸長に関わる遺伝子の機能解析
- ・自己回帰型アンサンブル蒸留
- ・クライオ電子顕微鏡による超大酵素の立体構造解析
- ・魚類運動の可聴化による水中生物の鑑賞方法の提示
- ・液晶タブレットを用いたDD者の漢字書字特徴の定量評価

- ・出前スタイルの陸水生態系遺伝子モニタリング法の構築
- ・アニサキスによるトランスポゾン水平伝播の確認
- ・卵巣がん転移機序の解明による新規診断治療法への挑戦
- ・バイタルデータ可視化によるポジティブ情動認知と伝染
- ・初期発生において背腹特異的に発現する小分子の決定
- ・Revealing Vpu acquisition and role in HIV pandemic
- ・Comparison of posture control during landing task

2022

- ・創傷治癒を促す漢方薬の探索と分子機序の解明
- ・人工細胞を用いたファージ検知システムの開発
- ・腸内細菌由来タンパク質によるアレルギー増悪機構の解明
- ・深海微生物による二種類のプラスチック可塑性の分解
- ・アニサキス依存性トランスポゾン水平伝播の証明
- ・eDNAの収量と感度の向上を導く新手法の開発
- ・植物のプログラム細胞死領域の形成メカニズム解明に向けた植物ホルモン経路
- ・発現速度の大規模トランスクリプトーム解析
- ・日本固有種であるマイマイカブリの行動追跡研究
- ・九州北部豪雨における線状降水帯の災害特性
- ・都市近郊域におけるアオケラの生息適地モデル
- ・気象衛星画像データの超解像
- ・TLSとUVAを活用したビオトープ管理手法の提案
- ・液晶タブレットを用いた書字動態における個人差の解明
- ・対話破綻回避によるシステムとの自然な対話の提案
- ・音楽聴取に伴う非自伝的ノスタルジアの生起モデル研究
- ・葬送の変容による死生観の変化について
- ・絵文字アートを用いた高自閉傾向者の顔認知機序の解明
- ・陳述記憶符号化における θ - γ 波カップリングの役割に関する考察
- ・足型測定における足底弾性計測システムの提案
- ・心拍情報共有によるポジティブコミュニケーション促進
- ・Analysis of the YxxL motif in VP24 of Ebola virus
- ・Investigating the oncogenic properties of AVIL in disrupting glioma-neuron interactions in C57BL/6 glioma model in vivo
- ・Comprehensive Search for Biofilm-related genes in Bacteria
- ・液晶による瞬きと物理的な瞬きによる印象の差の検証
- ・中国の政策決定過程における中央書記処の役割(1980 - 1987)：なぜ中共指導部の集団指導体制は持続するのか

2023

- ・脳卒中片麻痺患者の上肢における運動選択の特性の解明
- ・老化細胞産生エクソソームに含まれる代謝物質解析
- ・ユーザーの主体的なアバター加工行為と身体所有感
- ・リンク機構の応用による変形可能な建築設計の提案
- ・創傷治癒を促す漢方薬の探索と分子機序の解明
- ・CFSを用いた無意識下での視線認知の文化差
- ・脳波を用いたVR酔いの分析的検討
- ・「ジェンダー」と女性のエンパワーメントの再検討
- ・神経律動のゆらぎと単純反応時間のゆらぎの関係
- ・新型コロナウイルス感染症の新聞報道における発言分析
- ・SFCのサーキュラーエコノミー：食堂にコンポストを導入
- ・設計自由度の高い汎用柔軟積層印刷リニアモータの実装
- ・競走馬高速走行中における騎乗者の下肢の動作解析
- ・がん幹細胞制御因子の新規探索とその分子機構の解明
- ・パーソナルテンポに同調する音声対話システムの実装
- ・台風の遠隔降水のメカニズム - 2014年台風8号の解析 -
- ・Highly Sensitive Personにおける感覚ゲーティング
- ・看護学生のエコー使用体験と解剖生理の学習意欲の関係
- ・CNNを用いた飛行機経路における上層風予測
- ・常在腸内細菌由来タンパク質によるアレルギー増悪機構の解明
- ・冬季の水蒸気流入が及ぼす豪雪メカニズム解明
- ・協和音・不協和音の評価プロセスと知識依存性
- ・日本の多文化共生ガーデンの地域的展開と役割調査研究
- ・左右肢の順序・タイミングによる運動学習の変化
- ・学校現場における「封筒訓練」の普及とその効果
- ・Elucidating the Evolutionary Origins of Ebolaviruses
- ・Phylogenetic profiling of the Discs large homolog 4 protein
- ・to elucidate its synaptic evolutionary history and functional diversification
- ・SOMを用いた地形分類による大雨発生リスクの推定
- ・Proposing a strategy to capture microplastic using biofilm-inspired technologies



〒252-0882 神奈川県藤沢市遠藤5322

慶應義塾大学湘南藤沢事務室 学生担当 山岸学生プロジェクト支援制度事務局

E-mail: cdp@sfc.keio.ac.jp